ないが、三角錐の帽子や大きな胸の飾りボタンなどからマイセンが描いていた初期のピエロのイメージと考えられる。オールド・ノリタケは写真3のマイセンの初期の彩色されたピエロに近い。本稿では、オールド・ノリタケの博覧会の嚆矢となったハワード・コレクションの中で「ピエロ」という表記が見られるのでピエロと呼ぶことにする。

写真 4

3. アルレッキーノ

イタリア喜劇で定型化されたキャラクターはその数が百とも二百ともいわれるが、オールド・ノリタケに特に影響を与えたのはピエロと同じく道化師のアルレッキーノ（Arlecchino）である。フランス語でアルルカン、英語でハーレクインと呼ばれている。他の登場人物を打ち据えるためのスラップスティック（先の割れた打棒）を持ち、猫の面を被り、赤・緑・青のダイヤ柄の衣装を着ている。このダイヤ柄は、デザインの古いモチーフの一つとして現在も残っており、道化の衣装の起源とされている。

ヨーロッパの諸窯では、道化師の中で特にアルレッキーノのフィギュアが多数製作された。マイセンではケンドラーの原型による1741年頃にはすでにアルレッキーノが制作されている（写真4[3]）。近隣のドイツの諸窯でもさかんに製作され、その後セーブル窯に伝わり、イギリスでもさかんに作られた。マイセンのハーレクイン・シリーズのフィギュアは、とりわけ完成度が高く人気も高い。

4. オールド・ノリタケのピエロとピエレッテ

では具体的にオールド・ノリタケのピエロを見てみよう。

ハーメリングコレクション写真5～8はひょうきんな顔や大きな襟、胸のボタンや円錐形の帽子などでピエロとしての特徴が際だっている。ところが写真9は写真5から8のピエロの顔と違いがあり、これはピエロ（男性）ではなく女性のピエレッテ（Pierrette）である。ピエレッテはピエロの妻であるともいわれるが、少女風に描かれることが多

写真 5

写真 6

写真 7

いので、妻と限定せずにピエロの女性版＝ピエレッテと考えた方がよい。ハワード・コレクション展覧会の図録にも、“Amanda Pierrette”（アマンダ・ピエレッテ）が掲載されている[4]。（写真10）

ピエレッテはピエロ同様太い襟飾りと大きな胸のボタンが主な特徴だが、裾がひらひらした上

[3] 写真4: アルレッキーノ原型ケンドラー　1771年、橋田正信『マイセン磁器』平凡社　2002年　p40
[4] Noritake Art Deco Porcelains-Collection of Howard Kottler, 1982　p35